

## 『現実をしっかりと見据えろ!』

朝日新聞筑豊支局支局長 平岡 昇 氏

平岡 昇／ひらおか のぼる

1947年6月24日、長崎県に生まれ、山口県下関市に育つ。

山口大学卒業後、70年4月朝日新聞社に入社。愛知県豊橋支局を皮切りに全国各地に赴任。94年4月より筑豊支局に支局長として就任、現在に至る。

筑豊での出来事に精通し、しかも客観的な立場で報道を続けるジャーナリスト。彼らの目に映る筑豊の姿はどのようなものだろうか。「自分たちのスタンスを見つめ直そう」との意図で今月より始める筑豊総支局長シリーズ。第1回として朝日新聞平岡支局長にお話を伺った。

Q：ジャーナリストとして筑豊にどのような印象を？

A：一言で言うと、歯がゆくてたまらない。

西部本社に赴任してた時に汚職や鉱害事件などの取材で筑豊に日参した。10年ぶりに筑豊に来たが、やはり地方政治の不祥事が目につく。地方政治のレベルが10年たっても上がっていないんじゃないか。地域振興という大きな問題に対しても小さな自治体がそれぞれの縄張りでもチマチマとあがいている。石炭六法がもう失効するというを各自治体はちゃんと認識しているのだろうか。「石炭ショック」からもう20年にもなるのに、いまだに財政状態は最悪。将来の指針も聞こえてこない……。

この20年間に一体何をしてきたのか。このままでは筑豊は立ち直れない。

Q：一住民として筑豊は？

A：非常に住みやすい。人情に厚いし、排他的でないし、人物は多いし……。朝日新聞の九州の支局の中でも非常に人気のある地でもある。前任者たちも「今、どうなっている？」と何時までも愛着を持っている。この地で伴侶を見つける記者も多い。以前、夕張炭坑で筑豊出身者にインタビューしたが、彼らの筑豊への望郷の念は非常に強かった。繰り返しになるが、それだけに先に述べた状況が歯がゆくてならない。

Q：筑豊支局長として今後の抱負は？

A：外から見た筑豊のイメージ(必ずしも正しいとは限らないが)を変えるには内から変えねば。その為の報道をネチッコくやってく。地方の視点と同時に日本全体の中での筑豊という視点で見つめて行きたい。

## 『「議会に新風」が急務』

西日本新聞筑豊総局長 田村 允雄 氏

田村允雄／たむら のぶお

1944年3月5日、山口県萩市に生まれ、父親の職業柄(警察官)山口県で転居を重ねる。

北九州大学卒業、67年4月西日本新聞社に入社。佐世保市を振り出しに社社会部・九州・東京間を歩き来。この間、労働組合書記長や執行委員長も務める。

93年7月北京特派員より筑豊総局長として帰国、現在に至る。

今回は、ブロック紙として、より地域に密着した誌面作りを続ける西日本新聞にお伺いした。

Q：まず筑豊の印象を？

A：地域おこしの面で言えば「湿った木炭をウチワで一生懸命あおぐが、なかなか着火しない」ようなもどかしさを覚える。100年に渡り「石炭の栄華」が、この地に染み込ませてしまった意識は実に“罪深い”と思う。「なんちかんちいいなんな」「どげんかなるちやろもん」「ザーッといこう」。場当たり主義、利権漁り、行政と議会の馴れ合い……。

口では自助・自立を唱えながらも、行政や議会の実相は補助金すぎりでしかない。だが、住民側が「石炭六法」再延長なしのカウントダウンの中で、「地域おこし」に立ちあがっているのは頼もしい限りだ。

Q：一住民として筑豊は？

A：転勤人生だから、どこに行っても「住めば都」だが、知己を得た範囲で言う限り、男女を問わずカラッとした人情が気持ちいい。多くの場合、話がさっと通じるし、本音の談義になるまでに時間がかからない。2本の大河（遠賀川・彦山川）と緑の連山に囲まれたこの地の自然が育んだ民情だろう。

Q：筑豊にズバリ一言？

A：誤解を恐れずに言えば筑豊浮揚の最大の“障害”は、“議会の質の低劣さ”だ。これが行政執行部の力量向上を妨げ、「こげんありますと」と住民の自虐的なマイナス志向に押しとどめている。日常の住民運動に加え、選挙を通じて“石炭ボケ議員”大掃除をし、議会に若い世代の“新風”を吹き込むことが急務と考える。

Q：筑豊総局長としての今後の抱負などを

A：九州・山口に立脚するブロック紙としての使命は「地域とともに歩み、その自立と発展に尽くす」であり、4つの編集綱領の中でも根幹を成している。

やや大げさに言えば、西日本新聞は地域と「運命共同体」であり、ここが全国紙(中央紙)と違うところだ。筑豊の活力アップのため“縁の下の力持ち”として汗を流したい。

## 『出発、石炭街道』

毎日新聞筑豊支局支局長 木村 雄峰 氏

木村雄峰／きむら ゆうほう

1949年9月27日、秋田県北秋田郡生まれ。

早稲田大学卒業後、74年4月毎日新聞社入社。西部本社を皮切りに、東京・山口・鹿児島・大分を経て、94年筑豊支局長に就任、現在に至る。

地域に密着しながら、全国紙としての、幅広い視点からの行動をめざす誌面づくりに毎日新聞の木村筑豊支局長にお話をお伺いした。

Q：初めに筑豊の印象を？

A：石炭に関する物が、一目では分からなくなっている。炭鉱施設跡などは殆どなくなっているし。ただ他の地域には、外から見た「筑豊」というイメージや先入観がいまだに残っているように思う。

人間的にはザックバランで付き合いやすいのだが、他に比べて政治的不祥事が多い。住民から離れたところで、執行部と議会が馴れ合ったり、対立したりしているところが多く見受けられる。ごく基本的な「議会は住民の代表」との意識が薄いようだ。

Q：一住民としての筑豊は？

A：気になる点をあげるとすれば、社会資本の整備の遅れ。例えば、下水道の普及率の向上等が急務であろうか。しかし、概して言えば住みやすく、人情も厚い。町内会の集まりや、幼稚園に通っている子供を通じての父母会など地元の人たちと話し合うことが多いが、何の抵抗もなく受け入れてもらえる。

Q：筑豊にズバリ一言？

A：石炭の歴史を見て回る石炭街道＝コールロードの整備を提言したい。今のうちに保存しておかないと消失する。田川の炭住・小竹の慰霊碑・直方二字町の遊郭・折尾の堀川・水巻のオランダ人捕虜の墓、その他各地の資料館などを結び、アウトドア感覚で見て回れるようなシステムを作ってはどうか。歴史を肌で感じることができ、国内だけでなく韓国・北朝鮮・オランダ・中国と、外にも広がりを見せるものになるはず。それには、筑豊と中遠各市町村が連携して取り組む必要がある。

Q：筑豊支局長としての今後の抱負などを

A：筑豊を元気と活力ある住み良い場所にしたい。その為にできることは、おおよそながら、毎日新聞は全力で応援したいと思う。

会見データ：2月25日（土）、飯塚市毎日新聞筑豊支局にて 編集部：田中

## 『サイズと速度に合わせた街を！』

読売新聞筑豊支局支局長 古賀 暁 さん

古賀 暁／こが あきら

1943年6月10日、福岡県福岡市に生まれ、甘木市にて育つ。

西南学院大学卒業後、読売新聞西部本社入社。長崎・大分支局勤務ののち、  
経済部・社会部デスクを経て、93年4月から筑豊支局長に就任、現在に至る。

全国紙としてのスタンスと同時に地域と共にある新聞を目指し、「明日の筑豊を考える30人委員会」の事務局長を務めるなど筑豊の地域づくりに浅からぬ関わりを持つ読売新聞筑豊支局。古賀支局長自身、6・7・8期の筑豊ゼミ生でもある。

Q：筑豊の印象は？

A：都会に比べ時間の流れが人間の速度に似ている。大袈裟に言えば“人間の生きている喜び”や“味わい”等がごく自然に現れる土地柄だ。実に波長が合う。

しかしながら他の地域から見るとイメージが実に悪い。筑豊発の情報発信に努め、イベント等を利用して、とにかく一度筑豊に来てもらうなど、何らかのイメージ戦略が必要だ。

Q：ジャーナリストとして今の筑豊に感じることは？

A：まず 議員資質の低さ。利権がらみの感覚ばかり強く、しかも「悪いことだ」という認識がない。いま一つは小さな自治体が割拠していること。隣同士の町がそれぞれ似た様な施設を造る等、弊害の方が目につく。いずれも国からの巨大な補助金に関係しているが石炭六法失効後は、もうこれほど大規模・長期にわたる財政投融资は期待できない。

町村合併や議会改革など「地方自治体のリストラ」が最も必要な地域が筑豊かも知れない。拡大再生産・高度経済成長の夢を追うまちづくりではダメだ。筑豊の持つ資質と条件を踏まえ、自分たちのサイズと速度に合ったまちづくりをめざせれば・・・と思う。

Q：筑豊支局長として今後の抱負など

A：筑豊はいろんな意味で 新聞に対する信頼度も高く、反応も早くて強い。当支局に関して言えば、まさに千客万来、これほど読者と距離が近い支局はない。それだけに、全国紙としての視点と同時に「この地と共にある」との姿勢を貫きたい。きめ細かく“普通の人々の動き”に密着し、筑豊50万の人の名を一度は新聞で（もちろん良いことで）取り上げたい。